

Working Paper No. 341

青少年期における子どもとの接触経験は出生意欲を
高めるのか？
—既婚女性を対象としたアンケート調査の結果から

中村 真由美

2021年9月2日



SCHOOL OF ECONOMICS
UNIVERSITY OF TOYAMA

青少年期における子どもとの接触経験は出生意欲を高めるのか？—既婚女性を対象としたアンケート調査の結果から

1. はじめに

出生意欲を強める要因、そのひとつが「小さい子どもとの接触経験」である。子どもの頃に、自分よりも小さい子どもとの接触経験があると出生意欲が影響を受けるという見方がある。本稿では、この仮説を検証する。

青少年期における子どもとの接触経験が出生意欲を高めることを示唆する知見もある。Miller(1992)の米国を対象とした分析結果では、「面倒見の良さ(nurturance)」や「協調性(affiliation)」などの性格特性などが子どもを持ちたいという積極的な動機(positive childbearing motivation)に有意に影響していたが、これらの性格特性は10代に行った「子どもケア経験」やそれに対する評価とも関連していた。つまり、10代に行った子どもケア経験は性格形成を通じて出生意欲に影響していると考えられる。

日本においては、女子大学生の乳幼児との接触経験が育児イメージに影響することや(礪波 2011)、子どもが欲しいと答えた人に子どもと遊んだ機会が多かったこと(若島他 2008)、子どもとの接触経験が結婚意欲に影響すること(中谷 2018)が明らかになっている。

また、他の子どもとの接触経験という意味では、兄弟の多さが子どもの数に影響しているという知見もある。たとえば、Niesen et. Al (2018)のフィンランド人男性の子どもが子どもを持つ確率(IRR)を対象とした研究では、兄弟数が多い男性は、子どもを持つ確率が高いことがわかっている。日本の分析では、女性については、村上(2014)や川瀬(2012)の分析結果から、女性については兄弟数が多いことが出生意欲を高めることが明らかになっている。

このように子どもとの接触経験が出生意欲を高める可能性があるということを示す知見はあるものの、接触経験と出生意欲の関係を十分に明らかにしているとはいえない。特に日本の研究では直接、青少年期における他の子どもとの接触経験が出生意欲に与える影響について検証した研究は少ない。若島他(2008)は、青少年期における他の子どもとの接触経験との関連を検証しているものの、その時期を限定せず、一般的な子どもとの接触経験としておおまかに聞いている。さらにその経験についての本人評価(楽しめたかどうか)については聞いておらず、出生意欲との関連を検証していない。

そこで本稿では、青少年期(小学校・中学校・高校生時代)における他の子どもとの接触経験をより詳細に測り、また、その評価(子どもとの接触経験を楽しめたかどうか)も分析に取り入れて、出生意欲との関連を検証した。

2. データと変数

2018年3月に実施した、web調査「出産意識調査」をデータとして用いている。これは、

25～35歳で、子どもが0人または1人である既婚女性を対象としたインターネットモニター調査である。調査実施は電通マクロミルインサイト。

また、当該データの特徴として、「出生意欲」を示す変数として「理想の子ども数」と「現実的な（現実的に考えた場合の）希望する子ども数」の2種類について聞いている。同じ「欲しい子ども数」とひとことで言っても、それがすべての制約がない場合の理想の子ども数なのか、それとも現実的な制約も考えた上での希望する子ども数なのか、両者には違いがあると考えられる。そこで2種類の「欲しい子どもの数」について聞き、本稿の分析でこれらの変数それぞれについて分析を行っている。これらを従属変数として用いる。

具体的には、以下のように質問している。

あなたの、「ほしい子どもの人数」についてお聞きします。*少し似ていますが、(1)は「理想」、(2)は「現実的に考えて」お答えいただく質問です。ご注意ください (1)あなたが、理想として「ほしい子どもの人数」をお知らせください。理想ですので、実際に可能かどうかは関係なく、お答えください。

独立変数としては、接触経験を聞く質問3つ（「10代のころ（小・中・高校生の頃）、年下の兄弟姉妹の世話をした」、10代のころ（小・中・高校生の頃）、近所の子の世話をした」「10代のころ（小・中・高校生の頃）、学校の活動として、小さい子の世話をした」）、および、その経験に対する評価（「あなたは、その時（子どもと接触した時）に小さい子のお世話をすることについてどう感じましたか。」）についての設問を使用している。また、きょうだい数も用いている。

手法は、まず基礎的な分析として2変数の関係をみるため、クロス表分析と独立性の検定、および、残差分析を行う。

3. 知見の詳細

(1) きょうだいの世話をした経験

まず、「理想の子ども数」についてである。表1は「10代のころ（小・中・高校生の頃）、年下の兄弟姉妹の世話をした」かどうかという質問に対する回答と「理想の子ども数」との関係です。「やったことはない」と答えた人が3人以上と答える割合は25.3%であるが、「いつもやっていた」と答えた人では37.1%と割合が多くなっている。¹

¹ 残差分析によると後者は95%で有意。つまり偶然の結果とは見なせないレベルで、きょうだいの世話いつもやっていた人は子どもを3人以上希望する傾向である（理想の子ども数）。

表1：「きょうだいの世話をした経験」と「理想の子ども数」

	理想の子ども数 4 カテゴリ				
	0人	1人	2人	3人+	合計
やったことはない	93	131	642	293	1159
	8.0%	11.3%	55.4%	25.3%	100.0%
	-0.2	1.3	0.8	-1.6	
ときどきやった	35	54	307	119	515
	6.8%	10.5%	59.6%	23.1%	100.0%
	-1.3	-0.1	2.6	-2.1	
いつもやっていた	35	26	144	121	326
	10.7%	8.0%	44.2%	37.1%	100.0%
	1.9	-1.7	-4.2	4.7	
合計	163	211	1093	533	2000
	8.2%	10.6%	54.7%	26.7%	100.0%

$X^2_{(6)}=32.158, p<.001$

次に表2は「現実的な希望する子ども数」の結果を示している。

表2：「きょうだいの世話をした経験」と「現実的な希望する子ども数」

	現実的な欲しい子ども数 4 カテゴリ				
	0人	1人	2人	3人+	合計
やったことはない	120	381	612	46	1159
	10.4%	32.9%	52.8%	4.0%	100.0%
	0.5	0.5	0.1	-2.0	
ときどきやった	41	189	264	21	515
	8.0%	36.7%	51.3%	4.1%	100.0%
	-1.8	2.4	-0.8	-0.9	
いつもやっていた	40	79	178	29	326
	12.3%	24.2%	54.6%	8.9%	100.0%
	1.5	-3.5	0.8	3.8	
合計	201	649	1054	96	2000
	10.1%	32.5%	52.7%	4.8%	100.0%

$X^2_{(6)}=27.701, p<.001$

表2でも、接触経験と欲しい子ども数との関連がはっきりとでてくる。きょうだいの世話を「やったことはない」者は現実的な欲しい子ども数として3人以上を希望する割合は4.0%と低く、一方で「いつもやっていた」と答えた者は8.9%と比較的多くなっている。² やはり、子どもの頃に年下のきょうだいを世話した者は「理想」そして「現実」における出生意欲が高い傾向にある。³

2. 近所の子の世話をした経験

次に、自分のきょうだいだけではなく、近所の子の世話をした経験について分析を行う。表3は「10代のころ（小・中・高校生頃の頃）、近所の子の世話をした」かどうかという質問に対する回答と「理想の子ども数」との関係を検証する。

表3：「近所の子の世話をした経験」と「理想の子ども数」

	理想の子ども数4カテゴリ				合計
	0人	1人	2人	3人以上	
やったことはない	118	138	674	296	1226
	9.6%	11.3%	55.0%	24.1%	100.0%
	3.0	1.3	0.4	-3.2	
ときどきやった	40	64	374	201	679
	5.9%	9.4%	55.1%	29.6%	100.0%
	-2.6	-1.2	0.3	2.1	
いつもやっていた	5	9	45	36	95
	5.3%	9.5%	47.4%	37.9%	100.0%
	-1.1	-0.3	-1.5	2.5	
合計	163	211	1093	533	2000
	8.2%	10.6%	54.7%	26.7%	100.0%

$X^2_{(6)}=20.579, p<.01$

²残差分析によると前者も後者も95%で有意。つまり偶然の結果とは見なせないレベルで、きょうだいの世話をいつもやっていた者は子どもを3人以上希望する傾向あり、やったことがない者は3人以上を希望することが少ないということである（現実的な欲しい子ども数）。

³ ただし、因果関係が逆である可能性もある。もともと子ども好きだった人が、年下のきょうだいや、近所の子、学校の活動などで子どもの世話を熱心に行っていたということも考えられる。つまり、子どもの世話をした結果、子ども好きになって、出生意欲が高まったのではなく、もともと子ども好きな人が子どもの世話をしたが、出生意欲も高いという可能性もあるのである。因果関係を厳密に検証するにはパネルデータ（追跡調査）による検証が必要であろう。

やはり、近所の子の世話を「やったとはなし」と答えた人では「3人以上」希望する人の割合は低い（24.1%）にくらべて、「いつもやっていた」と答えた人では 37.9%と高くなっている。一方で、「やったことはない」と答えた人では「0人」を希望する人は 9.6%と特に多い（統計的に有意）。

つまり、相手が近所の子どもであっても、お世話した経験と「理想の子どもの数」は関連があった。

次に、「現実的な欲しい子ども数」について検証する。

表4：「近所の子の世話をした経験」と「現実的な希望する子ども数」

	現実的な欲しい子ども数 4 カテゴリ				合計
	0人	1人	2人	3人以上	
やったことはない	140	413	626	47	1226
	11.4%	33.7%	51.1%	3.8%	100.0%
	2.6	1.5	-1.8	-2.5	
ときどきやった	56	204	377	42	679
	8.2%	30.0%	55.5%	6.2%	100.0%
	-1.9	-1.6	1.8	2.1	
いつもやっていた	5	32	51	7	95
	5.3%	33.7%	53.7%	7.4%	100.0%
	-1.6	0.3	0.2	1.2	
合計	201	649	1054	96	2000
	10.1%	32.5%	52.7%	4.8%	100.0%

$X^2_{(6)}=16.558, p<.05$

「現実的な欲しい子ども数」についても、接触経験は欲しい子どもの数と関連している。3人以上を希望する割合は「やったことはない」と答えた人において低く 3.8%、「いつもやっていた」と答えた人において 7.4%と高くなっている。また、「やったことはない」と答えた人では「0人」を希望する割合が高い。

やはり近所の子どもであっても、自分が 10代のころに小さい子どもとの接触経験がある人は「理想の子ども数」においても「現実的な欲しい子ども数」においても多いということがわかる。

3. 学校を通じた接触経験

これまでは、自分のきょうだいや近所の子どもとの接触経験についてみてきたが、ここで

は学校を通じた小さい子どもとの接触経験と出生意欲との関わりについて検証する。

表5：「学校を通じた接触経験」と「理想の子ども数」

	理想の子ども数 4 カテゴリ				
	0人	1人	2人	3人以上	合計
やったことはない	118	137	615	279	1149
	10.3%	11.9%	53.5%	24.3%	100.0%
	4.0	2.3	-1.2	-2.8	
ときどきやった	40	64	425	216	745
	5.4%	8.6%	57.0%	29.0%	100.0%
	-3.5	-2.2	1.7	1.8	
いつもやっていた	5	10	53	38	106
	4.7%	9.4%	50.0%	35.8%	100.0%
	-1.3	-0.4	-1.0	2.2	
合計	163	211	1093	533	2000
	8.2%	10.6%	54.7%	26.7%	100.0%

$X^2_{(6)}=28.615, p<.001$

まず、「理想の子ども数」について結果を述べる。学校の活動として、小さい子の世話をした経験について「やったことはない」と答えた者では理想の子ども数が3人以上の人は24.3%しかいないが、「いつもやっていた」と答えた人では35.8%いる（どちらも統計的に有意）。一方で、「やったことはない」者では理想の子ども数0人の人が10.3%いるのに対し、「ときどきやった」人では5.4%、「いつもやっていた」人では4.7%と低い。

つまり、「学校の活動として、小さい子の世話をした」経験は、「理想の子ども数」と関連があるといえる。

次に「現実的な欲しい子ども数」について検証する。

表6：「学校を通じた接触経験」と「現実的な欲しい子ども数」

	現実的な欲しい子ども数 4 カテゴリ				
	0人	1人	2人	3人以上	合計
やったことはない	142	381	583	43	1149
	12.4%	33.2%	50.7%	3.7%	100.0%
	4.0	0.8	-2.0	-2.6	
ときどきやった	53	235	413	44	745

	7.1%	31.5%	55.4%	5.9%	100.0%
	-3.4	-0.7	1.9	1.8	
いつもやっていた	6	33	58	9	106
	5.7%	31.1%	54.7%	8.5%	100.0%
	-1.5	-0.3	0.4	1.8	
合計	201	649	1054	96	2000
	10.1%	32.5%	52.7%	4.8%	100.0%

$X^2_{(6)}=24.501, p<.001$

「学校の活動として、小さい子の世話をした」経験について「やったことはない」と答えた人は「現実的な欲しい子ども数」について「3人以上」を選ぶ割合が低い(3.7%)。

一方で、「やったことはない」人が「現実的な欲しい子ども数」0人を選ぶ割合は他カテゴリー（ときどきやっていた、いつもやっていた）よりも高い。

つまり、学校の活動の一環だとしても、小さい子の世話をした経験は理想であれ、現実的な数字であれ、欲しい子ども数と関わっている。

4. きょうだい数と欲しい子ども数

ここまでの分析で、「年下のきょうだいの世話をした経験」「近所の子の世話をした経験」「学校の活動として小さい子の世話をした経験」は出生意欲と関わっていることが明らかとなった。青少年期の子どもとの接触経験をした者は、出生意欲が高い傾向にある。

しかし、因果関係は逆である可能性もある。つまり、子どもとの接触経験により子ども好きになった（その結果、出生意欲も高まった）のではなく、もともと子ども好きだったために子どもとの接触経験が増えたという可能性もあるのである。

そこで、次に「きょうだい数」に注目する。自分のきょうだい数はほとんどの場合には子ども自身の選択の結果ではない。本人が子ども好きかどうかによってきょうだい数は左右されないことが多い。

つまり、きょうだい数は本人がもともと子ども好きか否かには影響されない、他の子どもとの接触経験を示す指標なのである。そこで、きょうだい数と出生意欲との関連を検証した。

表7：「きょうだい数」と「理想の子ども数」

	理想の子ども数4カテゴリ				合計
	0人	1人	2人	3人以上	
1人っこ	26	34	104	39	203
	12.8%	16.7%	51.2%	19.2%	100.0%
	2.6	3.0	-1.0	-2.5	
2人きょうだい	90	121	664	243	1118

	8.1%	10.8%	59.4%	21.7%	100.0%
	-0.2	0.4	4.8	-5.6	
3人きょうだい	29	44	281	206	560
	5.2%	7.9%	50.2%	36.8%	100.0%
	-3.0	-2.4	-2.5	6.4	
4人きょうだい以上	18	12	44	45	119
	15.1%	10.1%	37.0%	37.8%	100.0%
	2.9	-0.2	-4.0	2.8	
	163	211	1093	533	2000
	8.2%	10.6%	54.7%	26.7%	100.0%

$X^2_{(9)}=85.323, p<.001$

表7をみると、本人が3人きょうだいかそれ以上のケースでは「理想の子ども数」3人以上を選ぶケースが多い。それに対して、本人がひとりっこのばあいには0人を選ぶ割合（12.8%）や1人（16.7%）を選ぶ割合が高い。つまり、きょうだい数は出生意欲と正に関連している。

ただし、ここで興味深いのは、4人きょうだい以上のケースである。自分が4人きょうだい以上だった大家族出身者は、「理想の子ども数」として3人以上を選ぶ割合も高いが（37.8%）、同時に0人を選ぶ割合も他カテゴリの人たちとくらべると高い。たとえば3人きょうだいだった人は0人を選ぶ割合は5.2%と低いのに、4人きょうだい以上になると0人を選ぶ割合はむしろ高く、15.1%にもなっている。

次に「現実的な欲しい子ども数」の結果をみってみる。

表8：「きょうだい数」と「現実的な欲しい子ども数」

	現実的な欲しい子ども数4カテゴリ				合計
	0人	1人	2人	3人以上	
1人っこ	28	85	84	6	203
	13.8%	41.9%	41.4%	3.0%	100.0%
	1.9	3.0	-3.4	-1.3	
2人きょうだい	108	376	595	39	1118
	9.7%	33.6%	53.2%	3.5%	100.0%
	-0.7	1.3	0.5	-3.1	
3人きょうだい	42	162	319	37	560
	7.5%	28.9%	57.0%	6.6%	100.0%
	-2.4	-2.1	2.4	2.4	

4人きょうだい以上	23	26	56	14	119
	19.3%	21.8%	47.1%	11.8%	100.0%
	3.5	-2.5	-1.3	3.7	
合計	201	649	1054	96	2000
	10.1%	32.5%	52.7%	4.8%	100.0%

$X^2(9) = 58.037, p < .001$

「現実的な欲しい子ども数」についても同様の結果が観察できる。自分のきょうだい数が少なかった者は「現実的な欲しい子ども数」も少ない。きょうだい数が多かった者は「現実的な欲しい子ども数」も多い。

一方で、「理想の子ども数」同様に、「現実的な欲しい子ども数」においても4人きょうだい以上の者では0人を希望する割合が高い。

これが意味するものはなにか。きょうだいが4人以上となると、他の子どもとの「望まない接触」も強いられることが多くなるからかもしれない。たとえば、年下のきょうだいが多い場合、両親の手が足りなくことも多くなるので、遊びに行くかわりに弟妹の世話をしなくてはならない場面もあると考えられる。また、きょうだいが4人であれば、自分の部屋を持つことも通常難しいと考えられる。また、欲しい物を買ってもらえないなど、我慢しなければならぬ体験も多くなると考えられる。

つまり、10代のころに子どもとの接触経験がありさえすれば、大人になって子どもを多く持ちたくなるわけではないということである。そこにはもう一つの要因がある。それは「接触経験の快適さ」である。

5. 子ども接触経験の快適さ

いままでの結果から、10代のころの子どもとの接触経験が欲しい子どもの数に影響することがわかった。しかし、接触経験がありさえすれば、欲しい子どもの数は増えるわけではなく、きょうだいが4人以上になると、出生意欲が高い人と低い人とに両極端に分かれることがわかった。これは、他の子どもとの接触経験の快適さ、接触した経験が楽しかったかどうかによって変わってくるのではないかと。

そこで本節では、他の子どもとの接触経験の快適さと出生意欲との関係を検証した。

表9は、「あなたは、その時（子どもと接触した時）に小さい子のお世話をすることについてどう感じましたか」という質問への回答と「理想の子ども数」をクロス表にしたものである。

表9：「接触経験の快適さ」と「理想の子ども数」

	理想の子ども数 4 カテゴリ				
	0人	1人	2人	3人以上	合計
非常に楽しかった	9	16	149	107	281
	3.2%	5.7%	53.0%	38.1%	100.0%
	-2.7	-2.4	-0.5	3.6	
やや楽しかった	24	51	333	190	598
	4.0%	8.5%	55.7%	31.8%	100.0%
	-3.7	-0.9	0.8	1.7	
どちらともいえない	38	50	197	75	360
	10.6%	13.9%	54.7%	20.8%	100.0%
	3.2	3.4	0.1	-4.1	
やや楽しくなかった	10	8	51	20	89
	11.2%	9.0%	57.3%	22.5%	100.0%
	1.7	-0.1	0.6	-1.5	
全く楽しくなかった	13	3	15	10	41
	31.7%	7.3%	36.6%	24.4%	100.0%
	6.4	-0.5	-2.3	-0.7	
合計	94	128	745	402	1369
	6.9%	9.3%	54.4%	29.4%	100.0%

$X^2_{(12)}=93.583, p<.001$

分布をみると、子どもと接触した経験を「非常に楽しかった」と答えている人は、それ以外の回答を選んだ人たちとくらべると「理想の子ども数」3人以上と答える割合は38.1%と高く、0人と答える割合は3.2%と低い。

一方で、「どちらともいえない」「やや楽しくなかった」「まったく楽しくなかった」というようなアンビバレントな感情を示す答えを選んだ者たちは、3人以上を選ぶ割合が低くなっている（それぞれ順に20.8%、22.5%、24.4%）。そして、0人を希望する割合は高（順に10.6%、11.2%、31.7%）。

「現実的な欲しい子ども数」についても見てみる。

表 10 : 「接触経験の快適さ」と「現実的な欲しい子ども数」

	現実的な欲しい子ども数 4 カテゴリ				合計
	0 人	1 人	2 人	3 人以上	
非常に楽しかった	14	65	174	28	281
	5.0%	23.1%	61.9%	10.0%	100.0%
	-2.5	-3.3	2.9	3.3	
やや楽しかった	33	178	351	36	598
	5.5%	29.8%	58.7%	6.0%	100.0%
	-3.7	-1.1	3.0	0.2	
どちらともいえない	47	139	162	12	360
	13.1%	38.6%	45.0%	3.3%	100.0%
	3.4	3.5	-4.0	-2.4	
やや楽しくなかった	10	34	41	4	89
	11.2%	38.2%	46.1%	4.5%	100.0%
	0.9	1.4	-1.6	-0.6	
全く楽しくなかった	15	13	13	0	41
	36.6%	31.7%	31.7%	0.0%	100.0%
	6.4	0.1	-2.9	-1.6	
合計	119	429	741	80	1369
	8.7%	31.3%	54.1%	5.8%	100.0%

$X^2_{(12)}=101.180, p<.001$

「現実的な欲しい子ども数」についても「理想の子ども数」の分析と同様の傾向が観察できる。つまり、子どもとの接触経験を「非常に楽しかった」と答える人は、それ以外の人たちとくらべて、「現実的な欲しい子ども数」3人以上を希望する割合が高く、0人を希望する割合は低い。

さらに、接触経験について「どちらともいえない」「やや楽しくなかった」「まったく楽しくなかった」と答えている人たちは3人以上を希望する割合が低く、0人を希望する割合が高い。特に「まったく楽しくなかった」と答えている人たちにおいては、0人を希望する割合が36.6%と非常に高い。

この結果は何を意味するか。前節のきょうだい数についての分析結果とあわせると、子どもとの接触があれば自動的に出生意欲が高まるわけではないということである。たとえ子どもとの接触経験があっても、それが不快な体験であれば、むしろ子どもは欲しくなくな

るのである。

6. まとめ

ここまで、青少年期（小中高生時代）に小さい子どもの世話をした経験が多い人は出生意欲が高いことが明らかになった。きょうだい、近所の子、学校の活動の一部として小さい子の世話をした経験が多い女性は欲しい子どもの数が多くなる傾向があった。それは「理想の子ども数」についても「現実的な欲しい子ども数」についてもあてはまっていた。

ただ、因果関係が逆である可能性もある（つまり、小さい子どもの世話をしたから欲しい子どもの数が増えるのではなく、もともと子ども好きだったから小さい子どもの世話をし、欲しい子どもの数が多くなっている可能性がある）。

そこで、自分の意志や選択とは関係なく、他の子どもとの接触経験を示す数値である「きょうだい数」に着目し、出生意欲との関連を検証した。きょうだい数は通常、子ども自身が決定できないためである。きょうだい数についてもやはり、きょうだい数が多い人は欲しい子どもの数が多くなる傾向があった。

ただし、Niesen et. Al (2018)などによる既存の研究結果（きょうだいが多いと出生意欲が高まる）とは異なり、きょうだいが4人以上の場合にはアンビバレントな効果があることがわかった。きょうだい数が4人以上になると、出生意欲が高まるパターンと低くなるパターンとの両極に分かれるのである。

きょうだい数が4人以上の場合には、欲しい子ども数「0人」と答える割合が高くなっていった。きょうだい数が4人以上となると、「望まない接触」も増えると考えられる。4人以上であれば、子ども部屋も一人一部屋もらうことが難しい。きょうだいの世話をかなり担わなければならない。つまり、望まない接触も多くなるのではないかと考えられる。また、親の時間、愛情、経済的資源の子どもひとりあたりの配分が少なくなることも一因になっているかもしれない。この「望まない接触」の要素がきょうだい数4人以上の人の出生意欲を押し下げていると考えられる。

一方で、きょうだい数が4人以上の場合であっても、欲しい子ども数「3人以上」と答える割合も高い。つまり、二極化しているともいえる。

両者では何が違うのか？おそらく、接触経験の快適さが関係していると考えられる。きょうだい数が4人以上でも愛情や経済資源の配分、スペース、きょうだいの世話などで辛い思いをしなければ、きょうだい数が多いことはむしろ出生意欲の高さにつながっているのではないか。

実際、子どもの小さい子の世話をしたときの「経験の快適さ」と欲しい子ども数の分析では、接触経験が快適だった人ほど欲しい子ども数が多くなっており。一方で、小さい子どもとの経験が不快だった人は欲しい子ども数0人の割合が高くなっていった。つまり、10代のころの小さい子どもとの接触経験（とくにお世話をした経験）はあればよいというので

はなく、その経験が楽しめるものである必要がある。

では、どうすればよいのか。青少年期のうちに小さい子のお世話をする機会を提供する。ただし、本人にとって快適な経験になるように環境を整え、十分に配慮した上で行うということが出生意欲を高める上で重要であると考えられる。

最後になるが、「理想の子ども数」と「現実的な欲しい子ども数」との乖離についても述べておきたい。両者の乖離は予想以上に大きく、「理想の子ども数」で3人以上を希望する人は26.7%（合計）いるのに対し、「現実的な欲しい子ども数」については4.8%（合計）しかいなかった。少子化の現在でも理想では3人以上を希望する人は3割近くいるのに、現実的にはそれを実現可能であるとする人はわずか5%もいない。もしこのギャップを解決することができれば少子化問題を解決する上で役立つと考えられる。

子どもとの接触経験は「理想」と「現実」の両方のタイプの出生意欲に関係しているため、青少年にとって、他の子どもとの「快適な」接触経験を持つ機会を提供することは、「現実」の出生意欲も高めるということであり、少子化を改善する効果を持つ可能性がある。

文献

- 川瀬晃弘. 2012. 「出生率の決定要因に関する実証分析」『一橋大学経済研究所 世代間問題研究機構 CIS DISCUSSION PAPER』No. 536.
- Miller, B. Warren. 1992. “Personality Traits and Developmental Experiences as Antecedents of Childbearing Motivation,” *Demography* 29(2): 265-285.
- 村上 あかね. 2014. 「出生意欲の規定要因」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ』80.
- 中谷 奈津子, 2018, 「未婚男女における結婚意欲の関連要因—家族形成意識に関する福井・大阪における調査から—」『日本家政学会誌』69(2): 105-114.
- Nisén, Jessica, Pekka Martikainen, Mikko Myrskylä, Karri Silventoinen. 2018. “ Education, Other Socioeconomic Characteristics Across the Life Course, and Fertility Among Finnish Men,” *European Journal of Population*.34: 337-366.
- 礪波朋子. 2011. 「女子大学生の乳幼児との接触経験と育児イメージ及び擁護性との関連」『京都光華女子大学研究紀要』49: 13-25.
- 若島孔文, 須永直人, 野口修司, 2008, 「少子化問題に関する調査研究」『立証大学心理学研究所紀要』6: 27-49.

謝辞：本研究は JSPS 科研費 JP26350041 の助成を受けたものです。